

# 銀月夜のラビリンス

## 目次

### プロローグ

第一章 悪夢の始まり

第二章 幻想の日常

第三章 メイプルリーフの贈り物

第四章 運命の女神からの招待状

第五章 銀の弾丸

第六章 魔槍

第七章 爆炎の罨

第八章 銀月夜のラビリンス

### エピローグ

## プロローグ

都心に残されたわずかばかりのみどりが赤や黄に染まり、ここ品川にある戸越高校にも秋は訪れていた。敷地内に立つひととき大きな銀杏の古木が、はやくも黄金色にいろづきはじめ、澄み切った空の青と絶妙のコントラストを描きだしている。

しんと静まり返った校内に、午後三時を告げる鐘の音が響きわたった。

鉄製のいかにも重そうな扉で閉ざされている正門の前に、少女がひとり佇んでいた。

白衿のセーラーブラウスに紺地のボレロを重ね着し、ウルトラマリンのベレーを前髪だけ外に残してかぶっている。

おそらく、それがこの学校の制服なのだろう。ブルー系のチェックのスカートからは、すらっとした脚がのび、まっ白なソックスと黒のローファーが、とても自然な感じで、よく似合っていた。

彼女はとくに誰かを待っているというふうでもなく、門を目の前にただひっそりと立っている。だが、その表情にはどこか驕りがあり、何かを思いつめたような重さがあった。

ふいに、その手が動き、スカートの裾がわずかにひるがえった。

左手に下げている革の学生鞆から、彼女が取り出したのは、鈍く光る拳銃だった。

しばし、手の中の銃に目を落とす制服の少女。

その瞳に映っているのは、いったいどのような未来なのか。

やがて、ややうつむいたそのままの姿勢で、少女は静かに目を閉じ、なにごとか小さな声でつぶやいた。しかし一瞬後には、つと顔を上げ、かすかに滲んだ涙を手の甲でぬぐい去った。

少女は一步前へと足を踏みだし、その細い肩で鉄製の門扉を、力を込めて押しやった。

扉は、にぶい軋み音をたててゆっくりと開きはじめた。

## 第一章 悪夢の始まり

何処どこともしれぬ、深い闇やみの中。

少女がひとり、息をきらし、ゆかたの裾すそが乱みだれるのもかまわずに駆かけている。紅あかい鼻緒はなおの塗ぬり下駄げたをいつのまに失なくしてしまったのか、少女は裸足はだしだった。

だが、当の少女に、自分が裸足はだしのまま走っているのだという自覚など、まるでなかったにちがいない。なぜなら、少女はそのとき、何か得え体の知れないものに追われ、命のかぎりに逃げている途中であつたから。

追いつかれたのではないか、という恐怖から、少女は、走りながらも幾度いくどとなく背後はいごをふり返り、確たしかめずにはいられなかった。

やがて、少女の視界に、前方まえを行く、浴衣姿ゆかたの若い男が入ってきた。その背せをひとめ見ただけで、少女にはそれが誰だれなのか判わかつたようだった。

少女は安心したのか、ほっと息をつくと、大きな声で呼びかけた。

「お兄ちゃんあん！」

男は、ふりむきもせずに歩きつづけたが、少女はかまわずその男にかけより、腕をとって言った。

「お兄ちゃん、助けて！ わたし、追われているの……。お兄ちゃん？」

返事のない兄を訝いぶかつて、少女は暗くてよく見えない兄の顔をのぞき込んだ。

そこに、ふだん見なれた兄の顔はなかった。かわりにあつたのは……。

「あつ、あ、ああ……」

「きゃああああああつ！」

自分の上げた悲鳴で、琴宮ことみやかりんは目が覚めた。

ベッドの上。掛け布団かかふとんをはねのけて半身を起こし、胸に手をあてて、はあはあと荒あらい息をつく。額ひたいに浮いたあぶら汗をぬぐおうともせず、ただかたく目をとじ、そのまましばらく動かなかった。

かなり長いあいだ、かりんは静寂せいじやくと暗闇やみのなかで、胸の動悸どうまきがおさまってくれるのを待またねばならなかった。

どのくらいそうしていたのか、知るすべはないが、鼓動が規則正しく脈打つようになってはじめて、全身の緊張をとき、目をひらいた。

厚手のカーテンを通して射し込んでいるほのかな光は、太陽のそれではなく、室内ははまだ薄闇のなかに沈み込んでいた。どうやら夜明けにはほど遠い時刻だったらしい。

言いしれぬ孤独感におそわれ、いつしか、かりんはベッドの中央で膝を抱えてまるくなっていた。

「またおなじ夢……」

怪談話に特有の、この決まりきったパターンの悪夢に、まいばん飽きもせずになされつづけている自分がおかしくて、かりんは突然くすくすと笑いだした。笑いながら、しかし、流れだす涙をとめることができなかつた。

なぜなら、かりんにとって、いま見た夢は、ほとんど真実に近い過去のあるできごとから派生したもので、恐怖は常に、彼女にとっては現実そのものとさえ言えたから。

闇そのものに潜む恐怖を消し去るため、かりんは、枕もとからリモコンを探しだし、ボタンを押した。一瞬のタイムラグの後、蛍光灯のまっ白な光が明るく室内を照らした。

机やタンスなどの家具類は、すべて白木で統一され、部屋の中は明るい色調でまとめられている。にもかかわらず、どこかもの寂しい雰囲気があるのは、ぬいぐるみや人形といった類のものが見あたらないせいだろう。十代の少女の部屋にしては、少し整いすぎている感があった。

かりんは、チェストの上ののっているからくり時計に目をやり、時刻を確かめた。

「ふうっ……」

おもわず大きなため息がもれる。

時計の針は、午前三時ちょうどを指していた。

かりんは、もういちど眠りにつくべきかどうか、つかのま逡巡したのち、おもいきって起きてしまうことに決めた。

ゆるめに束ねておいた髪をほどいてベッドから下り、オフホワイトのパジャマの上に、カーキのジップアップパーカを羽織って窓ぎわへと向かう。

「ごわごわとした手触りの、生地きじの厚いカーテンを少し引き、窓外そとをのぞき見ようと窓ガラスに額ひたいを押しあてた。

ガラスはかりんの額から熱を奪って、みるまに白く曇くもっていく。硬かたくて冷たい無機質の感触。いまはそれが気持ちよかった。

ややあつて、かりんは思いつきり窓を開けはなつた。

刹那せつな、晩秋の冷涼れいりょうとした風がいきおいよく吹き込んできて、かりんの髪を乱した。マンションの九階ともなると、さすがに風が強い。

目を細め、頬ほおにまとわりついた髪を手で後ろうしろへと流しながら、かりんは素足すあしのまま、冷たいコンクリートのベランダへと、足を踏みだした。

しなやかな黒髪を風になびかせながら、手摺てすりにもたれ、夜明けまえの街まちに目を凝こらしてみる。だが、視線は自然に、むかつてやや左、東南の方角に向いてしまつた。

はるか遠くに近接きんせつして見える、ふたつの森のシルエット。

そのうちの一方いっぽうが、かりんの通かよう戸越高校とこしこうこうのはずだった。もう片方は戸越公園のそれである。

かりんの視線は、ふたこの森のシルエットから空低そらくたなびく翠雲くも、翠雲くもからまばらに輝く天の星へと、ながれるように移うつってゆき、いつしか、西の地平に傾きつつある十三夜の月へと変転へんてんし、そこで不意ふいに凍りついた。

月に関するかりんの記憶。

それは 驚愕きょうがく、悲哀、憎悪、そして言い知れぬほど深い恐怖。

今しばらくの暁暗あやみのあと、日は昇り、夜には、ふたたび月がその姿を現すだろつ。

そして、明日あしたの晩は十五夜。満月のはずだった。

## 夏。

花火が上がるまでは、まだ間まがあるようだった。

目の前を流れる川は、山間やまあいを縫ぬうように蛇行だこうしつつ、ゆるゆると南北に伸びている。

日本アルプスに端たんを発したその流れは、どんな猛暑もつしよにも決して涸かれることなく、人々に夏の涼じょうを運んでいた。

かりんは、川辺の土手に敷いたござの上に、涼しげなゆかた姿でななめに膝をくずしてすわり、暮れゆく夏の空をながめていた。

そのかりんの隣に、やはりゆかた姿で胡座をかき、うちわを扇いでいる青年がいる。かりんの兄、史郎である。史郎は、わりとがっしりした体格をしている。すわっているのですさほど目立たないが、立てば、かなりの長身であることに気づくはずだ。髪は夏ということもあり、短くまとめられている。顔つきは、どちらかといえは細面で、人なつっこい目をした好青年だ。

しばらくは、もの想いに耽るように、だまって暮れのこる夕空をながめていたかりんであったが、ふいに史郎をふり返り、言った。

「ひぐらしの 声なきやみて 星かぞふ っていうのはどうかな。ねえ、お兄ちゃん！」

かりんたちのまわりは、おなじように花火見物に来た人たちで、ごったがえしていた。日暮れまえからすでに宴が張られ、カラオケマイク片手に歌いまくる人久しぶりに帰省し、再会した同窓生を口説いている男。人混みのなかでわざわざ爆竹をならす悪ガキども。橋のたもとにならんだ屋台に群がる親子連れ。その他、様々な人たちが、これから打ち上げられる花火を待ちつつ、そこそこに騒ぎ、あるいは浮かれていた。

うちわを片手に、缶ビールを呷っていた史郎だったが、かりんが暇をもてあましたあげくに捻りだした俳句を耳にし、一瞬の沈黙のあと、思わず吹きだしてしまった。

涙を流しながらむせ返っている兄を、かりんはジロツと睨みつけた。

高い位置で結んだポニーテールをゆらしながら、口をとがらせる。

「……なによ、そんなに変な句だった？」

「い、いや、そうじゃないんだが……。おっ、そろそろ始まるみたいだぞ！」

「もうつ、ごまかさないですよ！」

「平凡というか、凡庸というか……。あ、いや、結構よくできているぞ。うん」

史郎は、かりんのぶすつとした表情に気づき、途中で無理やりことばをまげ、言った。

「うーん、そっかあ……。ちょっとありきたりだったかなあ？ じゃあ、こんなのは？」

かりんは、こほんとか咳払いをひとつし、やや間をおいてから口をひらいた。

「暮れなずむ 西の空にも 月出でぬ」

「……………」

「ねえ、こんどのは？」

かりんは、兄のゆかたの袖をつんつんと引っぱって、批評の催促をする。史郎は、しょうがないやつだな、といった感じで空を仰ぎ、言った。

「あの月をよく見てみい、三日月だろうが」

「それがどうかした？ だって、三日月出でぬじゃ、字余りになっちゃうじゃない。わたし、字余りの句って好きじゃないし……………」

史郎の口からふつとため息がもれた。

「……………念のために言っておくが、あの月はこれから沈んでいくところだぞ。月が西から昇るわけないだろ？」

「う……………。そ、そんなこと、もちろん知ってるわよ！ わたしはただ、月が……えっと、つまり、日が落ちてずいぶん暗くなってきたから、ようやく月が見えるようになったって言いたかったの！」

「ほう……………」

史郎が、いかにも疑わしそうな顔つきで、かりんを見やる。

「な、なによ、その目は！」

「いや、べつに」

かりんの追及をかわすため、史郎は喉をならしていききにビールを呷った。

「ぶつはーっ、旨い。夏はやつぱ生だな！」

「ふんつだ！」

かりんはしばし月を睨み、ちよつとなげやりな口調でもう一句ひねってみた。

「 月よ月 何故に三日月 盆今宵」

精神的には、月に八つ当たりしていたといってもよかつたろう。だが、それを耳にした史郎は、その句をくり返し、口の中でつぶやくように言ったあと、かりんをふり返ってうなずいた。

「うん、なかなかいいじゃないか。少なくとも、きょう詠んだ中では一番の出来だな」

「え？」

なかばやけくそ気味で詠んだ句が一番の出来と誉められ、かりんは少し複雑な気持ちで兄の顔を見やった。

「なんだよ、誉めてやったんだから、少しはうれしそうな顔をしたらどうだ？」

「だって……」

「太陰曆から太陽曆にかわってからのというもの、お盆に満月が重なることは、ほとんどなくなつたからな。風流さが失われつつある現代を嘆いて詠んだとみれば、いい一句だと思うぞ」

「そ、そうかな……」

それほど深い意味を込めて詠んだわけではなかったもので、いまひとつ素直によるこべなかつたが、それでも気分的には悪くない。史郎が誉めてくれることなど、めつたになかつたからだ。

「こころが潮時と、かりんは話題を変えることにした。

「遅いね、お兄ちゃん。もう七時すぎたよ。そろそろ上がってもいい頃だと思っ  
けど？」

「うーん、空が完全に暗くなるまで、待つてるのかもな」

それから十分ほど経過したが、花火が上がる気配はいっこうにない。

退屈したかりんは、ふたたび、指を折って文字を数え、ぶつぶつとつぶやきだした。だが、今度はどうやら、五・七・五・七・七の三十一文字、つまり短歌のようだった。

何回かの試行錯誤の後、とうとうできあがったのか、かりんはにこつと微笑み、ひとりうなずいた。そして、一度ふかく息を吸い込むと、ゆっくりと詠み上げていった。

兄と共に

花火待ちつつ

眺むるは

冥き流れの

銀の星屑

ややあって、史郎の口許に、ふつと微笑が生まれた。

もちろん、川面に映るほどの星はまだ出ていない。そのうえ、今夜はまわりが明るすぎる。かりんは、屋台や街灯の明かりを煌めく星に見立てて詠んだのちがいがなかった。

「お兄ちゃん、どう……かな？」

史郎がどんなふうに感じているのか少々不安に思ったかりんは、兄の様子を横目でうかがいながらそうつたずねた。

「まあまあだな。雰囲気は悪くない……」

「うん」

史郎の感想とも批評ともつかない言葉に、かりんは短く答えた。さすがに照れくさかったのか、前を向いたままである。

と、そのとき。この夜、はじめての花火が上がった。

腹に、というより、身体全体に響いてくる爆発音と共に、パツと色あざやかな火の花が、夏の夜空に浮かび上がった。

「わあ……」

かりんが思わず感嘆の声を上げる。

それからしばらくは、かりんも史郎も時を忘れ、目だけではなく、全身で花火を体感し、楽しんだ。

花火が始まって一時間ほどたったころ、史郎はふいに立ちあがると、下駄をつかけ、どこかに消えてしまった。

かりんは、小用にでも立ったのだらうと、そのときは気にもとめなかった。

それよりも、ずっと空ばかりを見上げていたため、そろそろ首が痛くなってきた。おまけに慣れないゆかたを着込んでいたので、胸が苦しうてしかたがない。帯をきつく締めすぎたのだ。

「はあっ……」

かりんは自分の緋色の帯を見て、ため息をついた。だが、この場では帯をゆるめるわけにもいかず、せめて首の痛みだけでもなんとかしようとして、ぐるぐると頭をまわしはじめた。

と、ふいに。

袂をだれかに引っぱられるのを感じて、かりんはふりむいた。

見ると、大きな朝顔をいくつも咲かせた白地のゆかたに、しぼりの赤い帯を締めた小さな女の子が、ちょこんとしゃがみ込んでいる。

かりんの従妹、まみだった。

「ねえ、おねえちゃん……まみ、わたあめがたべたい」

と、ちよつぴり舌つ足らずな声でまみがささやく。

「まみちゃん、おかあさんは？」

「あそこ……」

少女が指さした場所で、その子の母親は仰向けになって寝ていた。ようするに酔いつぶれて眠ってしまったのだ。その隣で父親も座ったまま船をこいでいる。

かりんはおもわず目をとじ、指先でこめかみを押さえた。

「わかったわ。おねえちゃんとふたりで買いにいこ！」

「うん！」

かりんがまみと手をつなぎ、土手の上の道を歩きはじめるやいなや、ふたりの前に、平均年齢十歳くらいの従弟たちがわらわらと現れ、声をそろえて言った。

「おれたち、たこ焼きね！」

「こらっ、あんたたち、ちよつと図々しいんじゃないの？」

「えーっ、なんでだよ、まみだけにひいきするなんてずるいぞお！」

かりんは夏休みを利用し、兄の史郎とふたりで、母の実家に泊まりにきていたのだ。

かりんの母の兄弟姉妹は、上に二人、下に四人、母本人を含めると全部で七人にもなる。そんなわけで、従弟たちの数もハンパじゃない。それが、お盆になるとあちこちから一斉に集まってくるのだから、にぎやかなことこのうえもなかった。

「もうつ、しょうがないわね。四人で一皿、仲良く分けて食べるのよ、いい？」

「けちい」

と、従弟たちの中から、あからさまな非難の声があがる。

「なによ、文句あるの？ いやならいいわよ、買ってあげないから……」

「ちえっ」

じっさいに舌打ちしたのは、ひとりだけだったが、全員がおなじ思いでいたことは、その顔つきからも明白だった。

かりんはしかたなく、従弟たち全員に一包みずつ買いあたえ、たこ焼き屋の前で彼らと別れると、まみと連れだつてひととおりの夜店を見てまわつた。

かりんは、わたあめでベトついてしまった指先をウエットティッシュで拭き取りながら、近くでたこ焼きを頬ばっている従弟のひとり、誠にたずねた。

「ねえ、誠くん。お兄ちゃん知らない？」

「史郎あにきなら、ねえちゃんといっしょに裏山のほうに行つたよ」

「姉ちゃんて……詩織ちゃんど？」

「そ！ オレがあとつけてつたら、あんたはついてきちゃダメって、ものすごい剣幕で怒るんだもん、まいったよ……」

そう言つと誠は、にいつと意味ありげな笑いを浮かべてみせた。

「ふーん、お兄ちゃんが詩織ちゃんとねえ……」

詩織は、かりんよりひとつ年下の従妹で、この地元在住の中学三年生である。かりんは首をひねつた。

どうも腑に落ちない。詩織が史郎に好意を抱いているのは知っていた。だが、いくら史郎が独り身で、現在つきあっている女性がないからといって、十二歳も年下の少女を本気で相手にするだろうか？

しかし、もしかしたら……という気持ちがないわけでもない。

かりんは真相を確かめるべく、行動にうつつた。

「ね、誠くん。だいたい場所はわかつてるんでしょ？ ちょっと行って見ない？」

黒々とした夜の森は、微かに吹く風にさわさわと葉ずれの音をたてていた。

史郎は今、暗い山道を詩織の後について登つているところだった。

「詩織ちゃん、あとのどのくらい？」

「もうすぐです……」

詩織と史郎のふたりが連れだつて人気のない山中に入つていったのは、かりんたちの想像しているようなことが理由ではなかった。

発端は、詩織のクラス男子数人が、ふざけ半分に酒を飲んでいるところを見知らぬ男に注意され、いきなり殴りつけられたことだった。

その場に居合わせた、詩織らクラスの女子たちの手前、黙って引つ込むわけにはいなくなつた男子たちは、落としまえをつけるため、その男を取り囲んで裏山へと連れていってしまったのだ。

責任感が強く、クラスのまとめ役でもある詩織としては、放っておけるはずもなく、警察沙汰などになるまえになんとかしよう、史郎に協力をもとめたのが、事の経緯であり真相だつた。

「ねえ、いま何か……聞こえなかつた？」

かりんは自分より背の低い誠の腕にしがみつきなながら、狭くて暗い山道を歩いていた。もつとも、山といつてもそれほど高い山ではないし、なにも山頂まで登ろうというでもない。山の中腹あたり、時間にして、十五分ほど登つたところにある、うらぶれた公園が目的地だつた。それでも、一歩足を踏みだすことに、ほとんど道を覆い隠している下草が、ガサガサと音をたて、かりんの恐怖心を増幅させている。

「ねえ……。あ、ほらまた！」

誠は立ち止まって耳をすませた。

「べつに……。なにも聞こえないよ。案外おねえちゃんて恐がりなんだね」

「な、なによ、そういう生意気なこといつてると、あとでひどいめに……」

と、そのときふいに、前方の藪の中から、ザザッ、ザザザッ、と音をたて、何かが近づいてきた。

「だ、だれ？」

かりんが叫んだときにはすでに遅く、それはいきなり、かりんに体当たりしてきた。狭い山道である。かりんは危うく谷へと転げ落ちそうになり、その場にしゃりもちをついてしまった。

「きゃっ！」

だが、意外にも悲鳴を上げたのは相手のほうだつた。

「あ？ 詩織ちゃん!？」

紺地の単衣をまとつた詩織だつた。詩織はすぐに起きあがったが、齒の根も合わないほど、ガタガタとふるえている。ぶつかつた相手が誰なのかもよくはわかつていないらしい。

「詩織ちゃん、わたし……」

「かりん……ちゃんなの？」

こう暗くは、お互いの顔もよく見えない。だが、詩織の取り乱しかたが普通じゃないことくらいは、かりんにもわかった。

「どうしたの詩織ちゃん？ お兄ちゃんに、何かされちゃったとか？」

立ち上がりながら、かりんは心ならずもそうたずねていた。

「ち、ちがう……そんなことじゃなくって……は、早くしないと、史郎さんまで殺されちゃう……。い、行かなきゃ……」

「え？」

思いもかけない詩織の言葉に、かりんは虚を衝かれた。一瞬、動きの止まったかりんの横を詩織の身体がすり抜ける。

「痛っ……」

だが、詩織は何歩も行かないうちにかくんと膝を折り、しゃがみ込んでしまった。どうやら、たった今かりんと衝突したときに足首を痛めてしまったらしい。かりんはあわててかけよった。

「だいじょうぶ？ 詩織ちゃ……あ!？」

かりんはそのときはじめて、詩織の左腕の異常に気がついた。

詩織のゆかたの左袖が、肩の付け根から引きちぎられてなくなっている。

こんな闇の中でも、むきだしになった腕は、白く浮きあがって見えるのですぐにわかった。

上で何かあったのだ。それに詩織自身も巻き込まれたにちがいない。

「詩織ちゃん、その腕どうしたの？ もしかして怪我してるんじゃない？」

かりんの言葉に、詩織は身体をびくつとふるわせ、あわててかぶりを振った。

「ううん、平気。こんなの、たいしたことないから……。それより、早く警察に……」

「けいさつ？ 警察って……ねえ、何があったの詩織ちゃん」

「み、みんな殺されたの、早くしないと史郎さんも殺されちゃう……」

気が動転しているのだろう、詩織の話は、さっぱり要領を得ない。それでも、史郎の命が危険にさらされていることだけは理解できた。

「誠くん、詩織ちゃんをおねがい！」

かりんは、すぐ側でぼうつと突っ立っていた誠に向かってそう言い置き、今しがた詩織が駆け下りてきた道を手探りで登りはじめた。

「だ、だめっ！　かりんちゃん、行っちゃだめだっば！　かりんちゃん!!」

山を下りるところか反対に登りはじめたかりんに驚いて、詩織は声を張り上げた。だが、かりんの姿は、すぐに闇にのまれ、見えなくなってしまった。

どうしていいかわからず、おろおろしている誠に向かって、詩織が呼びかける。

「誠っ!」

「な、なに？　ねえちゃん」

「お願いっ、あたしのかわりに、いますぐ、おまわりさんを選んできて!」

「おまわりさん?」

「そうよ、早く!」

「あ、オレ携帯もってる。これ使ったほうが早いかも……」

「か、貸して!」

かりんは、ひんやりとした地面に、裸足で立っていた。途中、あまりにも歩きにくいので、下駄をぬいで手に持ち、そのまま公園までたどりついたのだ。

しかし。

不意に、なにか異様な気配を感じとったかりんは、その場に身を伏せるようにして、しゃがみ込んだ。

な、なに、この感じ……。

背すじが、ぞくぞくする。

いつのまにか花火の音が止んでいることにも気づかず、かりんは闇の中でじつと耳をすました。木の葉ごしに微かにまたたく星明かりだけを頼りに、瞳を凝らしてもみだ。だが、公園は深い闇に覆われたまま、しんと静まりかえっている。まるでそこだけ、時間の流れから取り残されたようにさえ、感じられた。

風が止み、葉ずれの音もせず、いつもなら聞こえてくるはずの虫の声すら、いまは耳にとどかない。しかし、もし仮に、かりんが夜行性動物の瞳を持っていたとしたら……。

板が朽ちてしまって赤く錆びつき、無惨にも、骨だけが残ったすべり台やブランコ。桜や松、ぶなや白樺など、まったくなんの脈絡もなく植えられた木々。

平和記念塔と書かれた石碑。そしてそれらに混じって立つ、ふたつの人影を捉えることができたはずだ。

かりんは、その場にしゃがみ込んだまま、懐中電灯を持ってこなかったことをしきりに後悔していた。

「ここの暗くつちゃ、なあんにも見えやしない。」

もうここのなつたら、最後の手段。思いきって、お兄ちゃん、呼んでみよ……。そう思い、立ち上がりかけたそのとき。

闇の奥で、聞きなれた声がした。

「眼鏡をかけていなかったの、すぐにはわかりませんでしたよ」

それはまちがいでなく、兄、史郎の声だった。

かりんは史郎が無事だったことにほっとし、胸をなで下ろした。

詩織ちゃんてば、オーバーなんだから……。

殺されるうなんていうから、てっきり殴りあいの喧嘩でもしてるのかと思っただけじゃない。

でも、お兄ちゃんが喧嘩で負けるわけ、ないけどね……。

かりんは、声のしたほうにそろそろと這いすすんでいった。

「ふん、まさかこんな田舎で君に出会うとはな……。何故、こんな人気のないところにいる？」と訊くのも、野暮な質問だったかな」

「……………」

だいぶ闇に目が慣れてきたせいか、白がすりのゆかたを着込んだ兄の背が、おぼろに見えてきた。

「……………横井先輩こそ、どうしてここに？」

横井、先輩？

どこかで聞いたこと、あるような……。

「久しぶりに故郷に帰ってみれば、馬鹿ばかり……。少々、興が冷めてしまったな」

あまり親しげな雰囲気ではない。

だが、兄の話している相手が、どうやら知り合いだったと悟ったかりんは、こっそり近づくのがばからしくなつて、立ち上がった。

そして、そのまま声のした方に向かって歩きはじめる。

が、いくらも行かないうちに何かにつまずき、危うくころびそうになってしまった。かりは、自分が蹴つまずいたものを確かめようと下を向いた。

足もとには、バレーボール大の白っぽい塊が一つ転がっている。

なに、これ？

暗くてよく見えないので、かりんはふたたびしゃがみ込み、顔を近づけてみた。

それは、恐怖に歪み、目を見開いたまま動かない、少年の顔だった。

やだ、この子、目を開けたまま気絶してる……。

はじめ、かりんはそう思った。だが、その少年の首から先の部分が、どうしても見あたらない。かりんはもう一度、その少年をしげしげと目を凝らして見つめたあと、おそろおそろ手をのばし……。

マネキンか何か、よね？

髪をつかんで持ち上げてみる。

ずしりとした手応えがあった。どう考えても、人形とは思えないほどの重量だ。

そ、そんな……。

ぐるぐると渦を巻き増大していく恐怖と闘いながら、かりんはようやく事実を認識することに成功した。

見知らぬ少年の首が地面に落ちて転がり、闇を引き裂く悲鳴が、あたりの静寂をやぶって響きわたった。

「きゃーっ！」

悲鳴とほとんど重なるようにして、花火の炸裂する音が響いてきた。

そして、その瞬間、かりんは見てしまった。明滅する花火の明かりに照らされ、闇の中に浮かび上がった人狼の姿を。

「う……そ!？」

続けざまに打ち上げられる、花火の明かりのなかで、その人狼は笑みを浮かべていた。

あまりのショックに、かりんは完全に現実感を喪失し、呆然と立ちつくすことしかできなかった。

ふたたび、木々の間にざわめきが生まれ始める。

束の間まどろんでいた風の精たちが、森を駆け抜け、そこに棲むあらゆる生き物たちに、警告をあたえて去っていったのだ。

どうしてこんなに風が冷たいんだろう？

ぼんやりと、そんなことを考えながら、かりんは彫像のように立ちつくしていた。

動けなかった。

はだしの足を通し、夜気がじよじよにかりんのからだに入り込んできて、その心を凍りつかせていく。

そのとき、人狼がゆらりと動き、同時に史郎の身体が、真横にとんだ。

かりんの目には、兄の白いゆかたが残像となって、一瞬ゆらいだようにしか見えなかったが、気がつく人と人狼のこめかみに、ななめ上から打ち下ろすようなかたちで、史郎の拳が決まっていた。

ウエイトでは史郎のほうがまさっている。そのうえ、今日は三日月夜でもある。いかに相手が人狼といえども、その力を一〇〇パーセント発揮することができない以上、勝機がないわけではなかった。

しかし。

傾いだ人狼の軀、腹部のほぼ中央、臍と鳩尾の中間あたりに、史郎の足刀がくるぶしまでめり込む。

が、人狼はそのまま史郎の蹴りのベクトルに逆らわず、宙を舞った。そして、着地と同時に後方へと飛び退き、間合いを取る。

「ふん、腕は落ちていないようだな。だが、ただの人間である君には、この私を倒すことなどではしない」

長い舌をだらりと垂らしながら、人狼は唇の端を吊り上げ、笑った。

「見せてやろう、私の真の力を……」

人狼が浴衣を脱ぎ捨てた。そう思ったときには、すでに黒々とした漆黒の闇にまぎれ、その姿は見えなくなっていた。そしてすぐに、地の底を這うような、獣の低い唸り声が、近くの闇の中から響いてきた。

「お、お兄ちゃん！」

もはや、かりんを覆う闇それ自体が、彼女にとっては敵であり、死に神の振る鎌そのものと化していた。

かりんは、その場から一步も動くことができず、どうしようもない恐怖ゆえ、泣き声で兄に助けを求めた。

思わずかりんをふり返る史郎。

だが、その一瞬の隙を衝き、いまや完全に狼と化したぞねが、闇の中から跳躍した。

「ちいつ！」

間一髪、首筋への直撃こそ外すことができたものの、人狼の牙は、史郎の左肩と首の付け根あたりに、深々と食い込んでいた。

史郎は横様に倒れ込みながら、親指で人狼の目をえぐった。だが、それに怯む様子もなく、人狼は執拗に牙を食い込ませてくる。

地の上を転げ回りながら、史郎は必死に人狼の牙を引き剥がそうとするが、かなわなかった。

いまや、飛び散った血しぶきで、史郎のゆかたは紅に染め上げられつつあった。「お兄ちゃん！」

悲痛な声を上げ、駆けよろうとするかりんに、史郎が叫ぶ。

「は、早く逃げる！」

「で、でも……」

「何をしている、さっさと行け！」

かりんは刹那の逡巡の後、身をひるがえした。

そして、逃げだすかわりに、すぐそばの地面に転がっていた自分の下駄を拾い上げ、人狼に向かっていった。

「お兄ちゃんから離れる！」

紅い鼻緒を逆手に持って、かりんは人狼の横つ面をめちやくちやに叩きまくった。

「ガアッ！」

「きやつ！」

かりんは人狼の唸り声に驚き、思わず悲鳴を上げて飛び退いた。

だが、それで正解だった。

下駄を手にしていた右手が妙に軽いので、ふと、自分の手を顔の高さまで持ち上げてみる。と、ちぎれた紅い鼻緒が指のあいだでぶらぶらと揺れているだけで、肝心の台木の部分がなくなっていた。

「あ、あ、ああ……」

かりんは鼻緒を投げすて、その場にぺたんとすわり込んでしまった。人狼は、漆塗りの下駄を吐き捨て、頭を低く、地面すれすれまで下げ、かりんを睨めつけている。

闇の中で、つぶされずに残った獣の眸が禍々しい輝きを放つ。

史郎は、激しい出血のためか、仰向けに横たわったまま動かない。

「い、いや、こないで……」

かりんは、くるつと体をめぐらし、もつれる足で逃げだした。だが、ふと気がつくと、目の前に人狼が待ちかまえている。回り込まれてしまったのだ。

もはや為すすべもなく、かりんは死を覚悟し、目を閉じた。

そのとき。

二筋の光芒が、公園内をめまぐるしく駆けめぐり、ついには狼と化した人狼の姿を捉えてその動きをとめた。

「ちっ……」

懐中電灯の光に、まぶしそうに顔をしかめ、人狼が舌打ちする。

「お、おい！」

「ああ……」

ふたりの警官は、自らが照らした光の中に浮かび上がった狼の姿に一瞬たじろいだものの、すぐに気を取りなおし、銃を引き抜いた。が、次の瞬間には、懐中電灯のまるい光芒の中から、狼の姿はふっとかき消えていた。

警官たちは、慌ててあちこちに光を向けたが、その姿を捉えることは二度とできなかつた。

「お兄ちゃん！」

かりんは、はっと我にかえると、横たわったまま動かない兄のもとへと駆けよつた。

「しっかりと、お兄ちゃん！ お兄ちゃん！」

かりんの必死の呼びかけが、史郎の生命の炎をつかのま燃え上がらせた。

「かりん、はやく……逃げ、ろ……」

「う、うん。おまわりさん、来てくれたの……。きつと、詩織ちゃんが呼んでくれたんだよ。だから、もうだいじょうぶ、心配しなくてもいいよ……」

「そう、か……」

史郎はうつすらと目をあげ、そこにかりんの顔を認めると、わずかに微笑んだ。そして、ふたたび静かに目を閉じた。

「かりん……。あの、短歌……。よかった、なあ……」

「え？」

「ほ……。ら、兄と、共に……。っていう……。あれ、だよ……」

「あ、うん……。あんなのでよければ、いつだって詠んであげる。だから……」  
かりんは、ことは途中で喉をつまらせ、そのまま黙り込んでしまった。

頬を大粒の涙が、流れ落ちていく。

史郎の傷は、決して浅くはない。

かりんは少しでも流れ出す血を止めようと、ハンカチを取りだし、首筋の傷にあてがった。しかし、すぐに白いハンカチは真紅に染まっていく。

かりんの耳には、警官が無線で救急車の手配をしている声も、もはや届いてはいなかった。ともすれば、涙でかすんでしまいそうになる史郎の顔を、せいっぱい、目をひらいて見つめつづけ……。

ややあって、尺玉が、立てつづけに打ち上げられ、まるで真昼のような輝きを放った。

そしてそれを最後に光は薄れていき、やがて、光と音のファンタジーは終演を迎えた。

森は、ふたたび静寂を取り戻した。